

同胞愛を救え—全員で
— 信仰と思考の呼びかけ —

ピエランジェロ・シークエリ（ヨハネ・パウロ2世教皇庁神学研究所長）他著
あとがき：ヴィンチェンツォ・パリア（教皇庁生命アカデミー会長）

Pierangelo Sequeri

**K. Appel, C. Casalone, D. Cornati, J. Duque, I. Guanzini, M. Neri, G. C. Pagazzi,
V. Rosito, G. Serrano, L. Vantini,**

Postfazione di Vincenzo Paglia

Salvare la Fraternità - Insieme : Un appello per la fede e il pensiero

ジンテーゼ

『同胞愛を救え—全員で』は、ヴィンチェンツォ・パリア大司教とピエランジェロ・シークエリ神父に招集された神学者10名のグループが起草した呼びかけである。これは、教会の全構成員への、そしてすべての賢人、善意の人々への呼びかけである。課題に対峙するための呼びかけであり、単に承認されるかあるいは拒否されるべき分析ではない。忠実であるよう求められる命題の「指示」ではなく、熟考と討議が必要と思われるテーマの「目録」である。この呼びかけは、教皇フランチェスコの回勅『すべての同胞たち』¹に直接接触されて生まれた。提言は、この決定的な触発—開放を迫られている教会に向けられた、また引きこもることを誘惑されている世界にも向けられた—の深い意味に対する応答である。文化の専門職—神学およびそれ以外の—がコミュニティに対して果たすべき「知的奉仕」の高貴な意味を生き返らせる「知的同胞愛」の風潮を醸成しながら。

主〔イエス・キリスト〕は唯一の救い主である。「これは私たちの揺るぎない確信である。しかし教会の現在のカイロス²には、この輝かしい真理を覆い隠す多くの憂慮すべき徴候が見られる。神学の実践を党派闘争に変えるような（「私はパウロに、私はアポロに、私はケファに」コリントの信徒への手紙 I 1, 12）、重箱の隅をつつくような息の詰まる論争の気むずかしい頑固さが、しかし昨今は司牧の責任の行使に伴う偽善と墮落という、低劣な良識の欠如に凌駕されるに至っている。教会諸機関のこの過度の不適合性は、今や世界中で明白な事実である。教会管区に居住する係争と不道德は、現在、単に偶発的

な弱さではなく、システムの脆さを示すものとみなされている」。

回勅『すべての同胞たち』と一致して、「私たちは神学者、司牧者、弟子、および信仰心の篤い全市民と、今日の状況が私たちに迫っている危機の認識と、信仰が神学に要求する回心^{*3}への決意を共有することを望む。自己利益の重要性と共有される倫理への無関心によって形成された人間社会に直面して、教会の神学は全員のために、手ほどきを受けた人に向けた特殊用語に還元されない、創造的で手厚い思想の様式を獲得しなければならない。このことが教会組織内の著しい変化を必然的に伴うことになることは明らかだと思われる」。

この呼びかけは、「神学専門職に対する —そして一般に信仰心の篤いあらゆる人々に対する— 熱烈な招きである。現実には私たちが人質にしている二重の二元主義 —教会のコミュニティと世俗のコミュニティの、また創造された世界と救済された世界の— を解体する義務のために、特権的な共通のスペースを提供する必要があるからである。教会は、選ばれた者〔選民〕の精神的〔靈的〕貴族社会 (aristocrazia spirituale) ではなく、神とその被造物である人間との間の同盟の虹 (arcobaleno dell' alleanza) を護る歓迎の幕屋である。信仰は、世俗世界の言語の内に居住することを学ぶだろう —神の近接〔そば近くあること〕 (vicinanza di Dio) の告知についての先入観なしに。そして信仰に近接する教会 (prossimità ecclesiale della fede) は、カナンの人、サマリア人、ザアカイ、百人隊長にとっても居住可能なものになるだろう —地政学的距離についての先入観なしに」。

それは、賢人への呼びかけでもある。「私たちは、この時代の思考に見られる傾向を転換することをあなたたちに提案する。神の名を無視しないで下さい。真摯な信者の祈りは、地球のすべての男女のために神に向けられている。そしてその同じ信者たちは、すべての貧しい人と見捨てられた人のための仲介者として自分が使われるよう、神に自らを委ねている。私たちを批判して下さい。批判すべきときには —たとえ批判すべきでないときにも。しかし尊敬をもって神の名の神秘を護って下さい —たとえあなたたちにとって不可解でも」。

人間らしくあり続けるために、これまで以上に同胞愛を救う必要がある。「試行錯誤によってつねに新たに探求される、意味づける人間の理性の貢献なしに、信仰のキリスト教思想は、知的誠実をもって現実に地上に居住することはできない。それは、神の受肉の証明を要求するからである。相互疎外の必要性を良心に強いる数世紀が経過した後、私たちは精神〔靈〕 (spirito) の新たな政策を視野に入れて、感情移入〔共感〕に基づく交流の自由を経験する瞬間が到来したことを確信した。宗教的および世俗的なあらゆる機関の

崇高なる無視の配備〔同胞愛とは逆方向の〕は、兄弟殺し〔仲間の殺し合い〕—宗教的および反宗教的—において、私たちと私たちの子どもたちを犠牲にしてあまりに長く生き延びてきた。全員が兄弟姉妹である—だれ一人欠けることなく〕。

この呼びかけを閉じるあとがきで、ヴィンチェンツォ・パリア大司教が説明しているとおり、「教会諸機関は、信仰の知性と人間の思考とのより深いたゆみない対話を促進する役割を果たすことを要求されている。この刷新によって、神学と司牧は、同一のアクションの二つの側面として収斂する。最近の回勅『すべての同胞たち』は、人間のコミュニティ全体に奉仕する知的同胞愛の有効かつ不可欠な変形〔バリエーション〕(declinazione)として、この対話〔信仰の知性と人間の思考との対話〕の新たなパースペクティブをイメージするよう私たちを鼓舞する。学際的および各学問分野を超えるパースペクティブを再発見する推進力が、まさに神学の側でこの方向に進んでいる（使徒憲章『真理の喜び (Veritatis gaudium)』)^{*4}」。

ヴァティカン市国、2021年6月8日

序文

以下のページで私たちが提案するのは、課題に対峙するための呼びかけであり、単に承認されるかあるいは拒否されるべき分析ではない。より正確には、この呼びかけを生じさせた教会と文化の状況に関する私たちの記述は、この呼びかけの動機と緊急性を支える実態分析を行うための手段である。これは、忠実であるよう求められる命題の「指示」ではなく、熟考と討議が必要と思われるテーマの「目録」である。「同胞愛を全員で救え」という私たちの呼びかけは、むしろ教皇フランチェスコの回勅『すべての同胞たち』の強い刺激に直接触発されて生まれた。私たちの提言は、この回勅の決定的な触発 ―開放を迫られている教会に向けられた、また引きこもることを誘惑されている世界にも向けられた― の深い意味に対する応答である。文化の専門職 ―神学およびそれ以外の― がコミュニティに対して果たすべき「知的奉仕」の高貴な意味を生き返らせる「知的同胞愛」の風潮を醸成しながら。人間主義〔ヒューマニズム〕(umanesimo) ―宗教的および市民的双方の― が、私たちの呼吸を奪うウイルスによって巧妙にその核心を突かれている今日のグローバルな状況は、その〔知的奉仕の〕役割を不可欠なものにしている(どの人文学がこの問題に精通しているだろうか、つまり「専門家」だろうか?)。

この現状において、私たちは、人間のコミュニティを非神格化する相対主義の無頓着な行使と知的に戯れる時代は道徳的に終わったことを警告する。同じくまた、一被造物たる人間の共通の目的地という福音の希望を全員のためによみがえらせることのできる愛情ときずなの入っていない空の容器を、神の名を口にして保管するような― 神聖な定式句を無思慮に繰り返す時代も終わったことを警告する。

神の目的のうちに定められた時〔カイロス〕に、また被造物の好機に発信された私たちの呼びかけは、批判と自己批判の知的誠実性を要求する。それは、自らがその生きた証拠となる神との契約が私たちに課すのと同じ尺度で、他人のために人間的な生の尊厳を尊重する義務を人格的に負うことを私たちに要求する。私たちがイエスの福音から学んだ、この誠実性とこの契約が、神の近接と人間の同胞愛の思想を、最終的に信じられるものにする。宗教的および非宗教的思想がその最も高潔な動機において見つけ出すことのできる、この義務の思想と共有の実践が、世界についての新たな関心と歴史への新たな開放性を生じさせなければならない。そして、市民の労苦と希望を支える知性の同盟を尊重する地点に再びならなければならない。この知的な、そして自らがその生きた証拠となる同胞愛の精神において、多くのことが有益に議論されうる。無益に捨てられるものは何もないだろう。同胞愛の精神への呼びかけは、私たちの種の一性の感情移入〔共感〕に基づく感傷的な見方に格下げすることによって消尽されえない。無限の繁栄というロマンティックな政

策の神話的・ユートピア的なヴィジョンにも移管されえない。同胞愛の復権〔名誉回復〕は、私たちの時代にとって、一キリスト教と他の宗教によって、政治と権力によって、哲学と科学によって一 未踏査の深みがさらに思索される真剣なテーマである。私たちの呼びかけのテーマはこれである：知的同胞愛の内部ですべてのものが獲得されうる。その外部ではすべてが失われうる。無数の様相で屈辱を受け、見捨てられた人々を始めとする普通の人々が、それを決定的に確証する。それは最後の審判のテーマである 一全員にとって（マタイによる福音書 25, 31-46）。

1. 信仰の今日のカイロス

教皇フランチェスコは、回勅『すべての同胞たち』の中に、イエスを運ぶペトロの船の舵を取る職務〔教皇職〕の寛大な推進力を、確固たる仕方で総括して凝縮した。もしペトロが私たちのように嵐の中で恐れるなら、〔この作業は〕不要である。有名な福音の物語において（マタイによる福音書 8, 23-27；マルコによる福音書 4, 35-41；ルカによる福音書 8, 22-25）、弟子たちはみな嵐を恐れ、目覚めて彼らを救うよう、主に懇願した（「主よ、私たちを救って下さい！ 私たちは難破してしまいます！」）。自らの信仰の貧しさを識別させるために、イエスは弟子たちに死への恐れを優しく生じさせた。その恐れはしかし、イエスが彼らの祈願を聞き入れることを妨げなかった。弟子たちの祈願は見苦しく、マルコ福音書では少々無礼なほどである。「先生、私たちが死んでもかまわないのですか？」。私たちの祈願は、つねに疑わしい部分を含む 一私たちの恐れの高さは、自分の信仰の弱さをあらわにする。主は、自分の信仰の脆い部分を私たちに自覚させるが、しかしなお、願いが聞き入れられるよう主を振り返るとき、そのよい部分を受け入れて下さる。

私たち全員が自問しなければならない 一少なくとも、かの〔弟子たちのような〕懇願の純朴な真摯さを持っているかどうかを。また、水と風を制御できない私たちの不安をカムフラージュしないかどうかを。私たちはまた、自問しなければならない。自分のものではない力の所有を装いつつ、恐れによって、嵐を移動させるよう駆り立てられていないかを。あるいは、嵐の中でコミュニティの前に行くイエスのお蔭で持ちこたえながら、全員の名において祈願する代わりに、直接イエスの役を演ずるよう誘惑されていないかを。自分の弱さに対して私たちが 一正當に一 覚える自責感情〔良心の呵責〕と引き換えに。

この時代に生きる信者たちは、嵐を経験しその中で生きる。彼らは、コミュニティを導くためにイエスが選んだ弟子たちが乗る船の危険な揺れに気づく。この同じ信者たちは自問する。弟子たちは、彼らが大いなる自負心をもって宣言する唯一の救世主として、現

実にイエスへの信仰を持っているかどうかを。あるいは、その代わりに、彼らが実際には救世主のようにふるまっているのではないかを — 証人〔生きた証拠〕となる自らの召命を、あたかも自分の至らなさを公に告白することを免れる世襲の特典のごとくに取り違えつつ。彼らをかかるところのもの〔弟子〕にするのは、恩寵である（コリントの信徒への手紙 I 15, 10）。役割の適性でも職歴の功績でもない。重要なのは、単に人格的な美德である謙遜を深めることではない。無能であることの告白は、信仰告白に不可欠な本質的要素である。弟子である証拠を示す完璧な定式句は、つねに一つである。「キリストが唯一の救世主である。私ではない」（ヨハネによる福音書 1, 20 参照）。この告知の二つの部分は分離できない。そして、第二の部分にその本質的機能を割り当てるときが訪れる。主は人となった永遠の御子であり、固有の名を持つ。その名はイエスである。誰かがあなたに「見よ、ここにキリスト〔救世主〕がいる、あそこにキリスト〔救世主〕がいる、と言うとき、それを信じてはいけない」（マタイによる福音書 24, 23）。

人となった御子の身体は、疑いなく、全員が最後に彼とともに生きる一つの身体になるように、〔私たち人間に〕与えられる（第二ヴァティカン公会議『現代世界憲章』9）。しかしこの合体は置換〔交代〕（*sostituzione*）ではなく、また、決してそうならない。告知の最初の部分の真理は、第二の部分によって守られる。この条件においてのみ、私たちは告白しうる。一驚嘆し、感動して— 私たちの主との親密なきずなの真理を。しかしそれは人間のコミュニティのために私たちに与えられるのであって、決して信者のコミュニティの私有財産ではない。

今日の教会のカイロスには、この輝かしい真理を覆い隠す多くの憂慮すべき徴候が見られる。そしてこの徴候は、今般は冒瀆された叙階、裏切られた召命という恐ろしい証拠によって暴露された。神学の実践を党派闘争に変えるような（「私はパウロに、私はアポロに、私はケファに」コリントの信徒への手紙 I, 1, 12）、重箱の隅をつつくような息の詰まる論争の気むずかしい頑固さが、しかし昨今は司牧の責任の行使に伴う偽善と墮落という、低劣な良識の欠如に凌駕されるに至っている。教会諸機関のこの過度の不適格性は、今や世界中で明白な事実である。教会管区に居住する係争と不道徳は、現在、単に偶発的な弱さではなく、システムの脆さを示すものとみなされている。この露呈が、まじめで純朴な信者を教会からの大量離散へと追いやることは疑いないが、同じように、非常に多くの男女の組織的奉仕の献身に害を与えることも疑いない。しかし現象の重大性は、緩和ケアという手段をもはや許さないことを認めなければならない。キリスト教徒的生と教会統治の聖職権モデルの病的漂流から勇敢に辞去する必要性を組織に免ずる手立てはない。もちろんこの聖職権主義は、教会論の縮小と精神的〔靈的〕通俗趣味 — それは一般信徒と同様、司祭によっても同化〔消化吸收〕されうる— の精神的様相であることをしっかり

記憶に留めつつ（フランチェスコ『神の民への手紙』2018年8月20日⁵⁵参照）。

教会の社会的信頼性は、それが宗教的選択の人類学的模範と自動的に結合している限りにおいて失墜した。しかしその場所を占めなければならないのは、むしろ、予期しない神の手厚い恩寵—御子の受肉がすべての人間の救済（redenzione）⁵⁶と完成を配置する—の生きた証拠となる率直さである（フィリピの信徒への手紙2, 5-8参照）。

信仰の歴史に開かれた新たなカイロスは、神の王国の仕事の認証が、世俗世界の領域で反響するときである—信者のコミュニティの領域だけでなく、人間の都市の全領域で。教会の任務は、それを独占せずに、アクセス可能なものにする—ことである（『すべての同胞たち』54-55）。これが、この時代のキリスト教思想の歴史的召命である。このパースペクティブにおいて、もっと物わがりのよい世界への郷愁も、あまりに敵対的な世界への怒りも、等しく放棄される。神の王国の到来のために、すでに準備の整った世界も存在しない。その仕事とその徴候、その告知とその証拠によって、この到来を受け付けられない世界も存在しない。神の王国の実現は、私たちの序奏〔始動〕の、そしてその恩寵の歴史を超える。それは決してこの世界のものではない（ヨハネによる福音書14, 12）。それにもかかわらず、神の王国は、人が居住するあらゆる世界におけるように、つねにこの世界に芽吹く。それは、神の胎内に居住する慈悲の神秘である（ヨハネによる福音書3, 16-17）。

教皇の回勅に示された教えを宣教する推進路線に沿って、神学と司牧の知的奉仕の新秩序の構築に向けて私たちの呼びかけが目標としているのは、回勅のテキストの注釈ではなく、より明瞭に、回勅のメッセージの強さが集中している行いの力である。私たちは最初に、現状が私たちに課している危機の自覚と、信仰が神学に要求する回心の決意を、神学者、司牧者、弟子、および信仰心の篤い全市民と共有したい。しかし最後に、すべての善意の男女にも—知識人から始めて、たとえ宗教的所属について関心のない、あるいはそれに批判的な人に対しても—敢えて呼びかける。この素晴らしい、しかし困難な時代の住人たちとの新たな近接を共有することを承認する知的同胞愛の緊急性を確信して。

2. 危機のグローバルな徴候

私たちがそこに居住することを習得し、人間を救済するための御子の受肉の恩寵へと開放することを習得しなければならない新世界が、発展のグローバルな技術経済モデルを支えるシステムの傷つきやすさの強力な徴候を通して、新たな千年紀に告げられた。

もちろん私たちはこのシステムが、その議論の余地のない〔万人の認める〕メリットと、否定することのできない矛盾とともに、決定的な程度に西欧の近代の文化と政治の投影である事実を自覚している。その近代性は、引き続き、欧州教会のキリスト教精神の影響力の歴史を包含する。それゆえ、次の事実を考慮する必要がある ― 様々な歴史および世界の「人間の」コミュニティの内部で、またその内部から観察される「人間性〔ヒューマニズム〕の」危機の徴候は、欧州の思考の伝統的な手法によるのと同じ仕方で、また同じパースペクティブでは解明されえないことを。同様に、私たちは次の事実も警告しなければならない ― 他宗教的伝統は、キリスト教思想の欧州の経験の特徴づけるような法典や緻密な文書を精巧に練り上げる様式と同質の、文化および社会の領域における思考と現存の様相、およびそのグローバルな普及の様相を示していないという事実を。したがって、宗教的および人文学的テーマに関して、謙遜な態度と、個別特殊の伝統を丁重に聴取することが必要である。とは言えしかし、今日の組織化された市民社会と人間のコミュニティの惑星規模の形成において、現在、決定的に重要と思われる科学的、技術的、経済的、政治的文化の普及と同化〔消化吸収〕は、欧州の伝統の内部で綿密に練り上げられた社会的・文化的手段と装置を拡張した成果である事実も認められる必要がある。概括的だが明白でもあるこの考察は、確実に、今日、注意深い批判的熟考のテーマとして採用されなければならない。まさに昨日まで欧州と西洋の技術的・経済的手段の拡張と自動的に結合していた倫理的・人間的進歩の質そのものが、正当にも、実際に問われているからである。様々な文化的伝統に属する市民の感性のうちに領土を拡大している、この緊張の重大な証拠が、今や私たち自身の文化の内部にも進出しているように見える。したがって、このパースペクティブにおいて、世俗化と宗教、人間的な倫理と物質的な発展との間のグローバルな緊張の中で不意に出現する難題が、私たちの時代の「人間性の問題」のグローバルで統一的なテーマとして ― しかるべき相違〔多様性〕を施されて ― 今や現実に出現していると言うことができる。

いずれにせよ想定外の規模の、そして強烈で象徴的なインパクトを持つ、人を疲弊させるようなできごとが、明らかにより豊かでより安全な、より合理的でより推進力のある人間社会も含めて、人間社会のシステムの傷つきやすさをあからさまに告げている。倒錯した犠牲の宗教心の高揚（原理主義テロリズム）、金融市場が富を産出するという錯覚（負債への投機）、見捨てられた市民たちの増大する絶望（集団移住）、テクノクラシー〔技術万能主義、技術家政治〕の管理の脆さの過小評価（パンデミックの麻痺）― これらは、時代の地平線に姿を見せる幻滅〔迷いからの覚醒〕が出現する、〔新時代の始まりの〕前徴となる出来事である。

経済的および技術的成長という現代的な約束を伴う人格主義的および共同体的人間主

義を背景に、個人主義と同族意識〔種族的優越意識〕(tribalismo)をグローバルに圧出する現在の逆流は、民族の分断と民主主義の排除という地方特有の効果とともに、いっそう過酷な証拠をもって私たちに傷つけている。所有の不平等と社会的放置の増大は、他方で、それに対応すべき倫理的・人間主義的連帯の進化から顕著に切り離された技術的・経済的グローバル化の否定的効果を倍増させる。この効果は文化的には西洋の近代性の影のゾーンから出現する。世俗都市の政治と法は、個人的嗜好の自由と共通善の拘束力との間の制御しえない格差に直面して大いに困惑している。その現実的な分断のプロセスは、理想的などの再編プロジェクトよりも迅速に進行する。技術的・経済的権力のグローバル化は、他方で、否定しえないすべてのメリットによって、決してこの衝突の信管を除去することはできない。いずれにしても、〔人々の目には〕これがグローバル化の最大の懸念であるようには見えない。反対に、それは服従と選択という並外れて強力な装置の合目的化を、快樂と包摂(inclusion)という架空の興奮剤のレトリックで偽装し続ける。

「技術的・経済的装置の推定的中立性と普遍性」という反人間主義的な暴力は、再び繰り返さないことを誓った帝国主義と植民地の過去の忘却へと巧みに引き継がれる。しかし、その略奪し分断する暗い魂は、環境生態学と社会の貧困化に惑星規模の効力を及ぼし続けている(教皇フランチェスコ回勅『ラウダート・シ』*)。

手段的理性の技術的・経済的進歩に束縛された墮落と絶滅の宣告から、巨大な大衆を解放する惑星規模の効力の物語は偽りではない。しかし他の手段によって、より大きいスケールで同じ効力を生み出すことも等しく否定できない。この矛盾を公正に承認することに帯する抵抗—頑強なイデオロギーで屈折した技術的・経済的理性に束縛された抵抗—は、自由と進歩の個人主義文化—財と消費に敬虔な物質主義に大胆に結び付けられた文化—のブラックホールである。しかしそれが約束する個人の自由は、依然として、大衆にとって並外れて魅力的である—その防御を託される独裁主義的、絶対主義的統治の古いモデルが、かつて行使した煽動〔暗示作用〕をもってそれを再編成するまでに。その信頼性は、実質的に分配し包摂する、金融資本主義の権力者の物語—多数者の幸福を増大するために不可避の条件として、少数者の手にエリート主義的に富を集中させることを正当化する物語〔ex.トリクル・ダウン理論〕—に依存し続けている。快樂の欲求を実存的な質の至高の目的とするマスコミのプロモーションは、グローバルな魔術的効力を持つ。結局のところ、誰が私たちのように生きたくないというのか? スーパー・マーケットはいつも開いており、娯楽はいつもそこにあり、接続は私たちをどこにでも出現させ、スピードは機会を倍増し、性的サービスは自由にアクセスでき、住宅地区は地球のどのメトロポリスのグローバル市民にとっても、保護された排他的な、住み心地のよい生活圏のバブルである。

現実にはしかし、無意味な実存の苦悩 —今や、快適で良識を欠いたこの世界を支えるために新たに組み入れられた西半球の世代に浸透している苦悩— が、剥奪された実存のフラストレーション —今や、排除されることが確実な世代と市民が、エリートに好都合に、特権を持つことをつねにいつそう縮減されながら長い間経験してきたフラストレーション— と地下深くで癒着する。同時代の人々のこの秘められたニヒリスティックな出会い〔実存の苦悩と実存のフラストレーションとの出会い〕によって蓄積された批判の堆積は、人間の共同生活と知的創造性のあらゆる機関を徐々に動揺させ不安定にする。

事実、一般化された快樂への権利を鍵にして、無政府主義的個人主義を併合し再び重要視させながら、権威主義的パターナリズム〔家父長主義〕の 20 世紀末の通告に反発する政治的制度改革は、自由で平等なコミュニティに対する責任のプロジェクトをまったく持たない。将来の世代を、倫理的・政治的人間主義の技術的・経済的な崩壊から保護するものもない。父の喪失というよりは、今や子どもの放置が現代の自由の支配的な暗号である。子どもたちの全体闘争が告げられる —中味のない、空にされた力によって方向を見失われ裏切られた、自由で平等な同胞愛の邪悪な顔。最後に、それをさらに高揚することで個人主義を回復させようとするのは、単に、最終的に無に帰する〔零和の〕慎みのない不作法な遊びですらない。それは情け容赦なく利益の上がない未払金の精算を伴う回転ゲームである。党派のために信じ、服従し、闘わなければならない個人集団の全体主義の経験の挫折は、今や、過去の歴史となった（しかしいつでもすぐに他の手段によって復帰する準備ができています）。自分のために計算し、決定し、闘わなければならない個人集団の新自由の経験の挫折は、今まさに上演中である（それ自体についてまったく準備ができていない様相を呈しつつ）。

自己利益の価値と、共有の倫理に対する無関心によって造形された人間の共同生活は、逆説的に、個々人の革新的な行動主義によっても変更不可能になる。相互の無関心においても、自由で平等な個人の分子社会を政治的に変容することは、今や切望されるどの救世主の主観にとっても、すでにその射程外である。

市場の法という試験的なアルゴリズムが、人間のコミュニティの政治的権能に取って代わる。実質的に各人に手渡される自由、すなわち、自らの請負人や代理人である自由が、実際にはそれと符合して、その自由を保護すべきコミュニティの組織を徐々に蒸発させる〔ex. 公的医療、福祉制度の崩壊 etc.〕。最後に、「私の自由は他者の自由が始まる場所で終わる」という定式句の無邪気さが、新自由主義の理性の狡猾さを不思議に取り払うような、不穏な闇を生じさせる。実にこのテーゼは、膨れ上がる競争的な自己実現を見境なく

合法化する脈絡において、当然のように他者の自由を犠牲にして、私の自由を拡大することをイメージするよう鼓舞する。早晚、法律がそれに続く。

個人はつねにコミュニティからより少なく受け取り、コミュニティはつねに個人からより少なく受け取る。財の分離は双方を貧しくする。この分離は、私たちが社会的に優勢な知識から日常的に受け取る二重の矛盾した命令の強靱な持続によって養われるから、ますますそうである。

他方、政治の物語は、個人の完全な恣意の対象に私たちを追いやる。それは、私たちに関しては、私たちを生と死の区別の、また同じように善悪の弁別の主人にする。他方、科学の物語は、私たちの最高の機能の有機的・技術的装置への全面的な依存を受け入れることを私たちに強いる。おそらく私たちは、精神的に不安定にさせるこの二重のきずなの効力にこれ以上長く耐えることはできないだろう。それらの広く行き渡った精神病理学的効力がすでに際立っている。とかくするうちに、私たちの隣人愛の風紀紊乱と市民の同胞愛への無関心がウイルスのように拡散する。そして、私たちの生の伝授に人間的形相を与える精神性〔靈性〕(spirito) と制度(結婚と家族、言語とコミュニティ、学校と病院、労働と芸術、法律と政治)の広大な領土 ―地政学のおよび精神的な― を植民地にする。

この意味において、同胞愛は、現代人の自由の達成されなかった約束であると言えることができる(教皇フランチェスコ『人間のコミュニティ』2019年2月11日)^{*8}。コミュニティの救済は、まさに個人の独自性のうちに人間的な質を買い戻す〔贖う〕(riscatto) プロジェクトにとって、おそらく決定的なプライオリティを帯びる。換言すると、同胞愛／人間の近接(prossimità dell'umano)が、私たちの時代の人間学的問題の最大の特徴になる(フランチェスコ『すべての同胞たち』8, 53)。

3. 神の学問〔神学〕(teo-logia)、共通善

今日の神学は大抵、それ自体とその伝統を福音化することに専念しているように見える。それは、ほとんどすべての任務を、言葉を現代化すること、および／または、その語彙の遺産の内部的価値を再提出することに費やしている。それは、その文化的な異質性〔文化の外にある外部性〕を自覚しているが、なお漠然とのみである。

内部への、そしてまた ―その意図において― 外部への、信仰の伝統的な解釈学をまさに物惜しみせず寛大に使用する枠組みにおいて、神学はその外見にかかわらず、その

資源のほとんどをキリスト教ではないものの説明に費やしていると言うことができる。あたかも、この神の神秘を自分たちの時代のすべての男女にアクセスできるものにする信仰の証拠 ―教会それ自体！― が、キリスト教が目に見える形で理解できる仕方で議論され、実践される通常の場合以外のところで、つねに労苦して発見されなければならないかのように。キリスト教による本物の生きた証拠を呼び覚ます努力に、かくも広範囲にわたって集中させられる、この信仰の知性の文化的労苦は、コミュニティの司牧ケアの機敏さによって、支えきれない重荷を負わせる結果になるように思われる。そして、信仰によって触発される、思考の知的創造性への躍動を取り去る。純粹な教会再建の枠組みにおいては、表面的にはかくも広範な考察、書物、深化、プロジェクトの神学的な討論は、福音の種子を撒くための畝〔うね〕を時代の思考の内部に掘ることをせず、人間の経験と知識の広大な領域にその通行のいかなる軌跡も残さない。自己準拠〔自己言及〕(autoreferenzialità)の感覚の産出の膨大さと、その文化的創造性の卑小さとの間のかかる不均衡〔アンバランス〕は、主〔イエス〕によって私たちの寛大さに委ねられた才能の投資についての道徳的問題を提出しさえする。そして、思考がこれらの才能の究極のものでないことも確かである。

自己準拠の信管除去は、人間性の状態(誕生と死、憤りと赦し、貧困と富、力と病気)の情緒的表象〔外観〕(figure)の一切の根源にある神聖性との弁証法的対決という典型的な戦略によって、イエスによって養成された人間性の状態の解釈法の鍵〔要点〕への真摯な回心から導き出すことができる。

イエスは、つねにそして精密に、この人間性の「共通空間」で「神を語る」。〔イエスの〕人間的な近接は、つねに神聖性の解読〔理解可能な形での伝達、通訳〕(decifrazione)である。まさに人間性の墮落は、つねに神聖性の誤読〔意味の取り違え〕である。私たちは今日、神聖性の魅惑的かつ恐るべき浸透が、文化人類学の視点から、まさに以下の事実にかかっていることを完全に認識することができる：それは、もし私たちが救われることを望むのであれば、神聖性は ―すべての宗教、すべての文化、すべての文明において― いかなる犠牲を払っても護持されなければならない命令と禁止の絶対的な形式〔ex. 定言命令；「善をなし悪を避けよ」〕へと再び送り返すという事実である。宗教は、私たちの救済の原因〔救済因〕(nostrae salutis causa)を丹念に練り上げ修養する、私たちに周知の形態である。しかし神聖性の前でのこの義務の神秘は、神聖性を実存のおよび社会的、文化的、制度的に解読〔通訳〕するものであり、またそれは、外被である伝統的な宗教的形態から離れても働き続けるという事実がますます明白であるように思われる。神聖性の問題において明らかに困難な状況にある今日の世俗社会自体が、このテーマについて駆り立てられる必要がある。神聖性のこの配置転換〔伝統宗教から世俗社会への〕についてより

知恵のある、より責任のある思考を生み出すために。世俗都市にとって、現実には何が、個々人の生命の犠牲を強要するまでの死活問題なのか？ 誰を、また何を、私たちはあらゆる犠牲を払って護るのか？ 罪がないのに誰を、そして何を、私たちは犠牲にするのか？ イエスによって啓示され、宗教それ自体の徹底的な宗教的批判によって消化された、固有・独特で他に代替できない神聖性の解釈の交流と知識によって、神学は、神聖性が浸透する深みの思考 — 宗教的および非宗教的な — を、人間の文化全体に有利に発酵させることができる。

それゆえ教会神学は、手ほどきを受けた者のための特殊用語に還元されない、全員のための創造的で人々を厚遇する手厚い思考スタイルを獲得しなければならない。このことが教会制度の意義深い変化をもたらすことは明らかだと思われる。— アカデミックな制度においてはもちろん、基礎の制度においても。この基礎の変容の焦点 — およびカノン〔正典、根本原理〕 — は、啓示それ自体が根拠を置く表象 (immagine) に要約されうる。

福音書の啓示の原風景〔オリジナルの場面〕は、つねに次の構造を持つ：イエス、弟子たち、誰であれ群衆、そして修道者および／または市民の姿で様々に演じられる敵対者。現代の教会論は、群衆の福音伝道〔布教〕を先送りにして、イエスと弟子たちの直接的な関係を特定の扱ってきた。かかる福音伝道が、聖職者の補充および受洗した信者の階層的な服従と実際に一致する結果に至るまで。この福音伝道の原始「教会の (ecclesiale)」場面のこの硬化と脚色が、今日すべての「司牧職の (pastorale)」危機のうちに見られる。イエスに呼ばれた弟子たちは、啓示の真正性の権威ある仲介のために不可欠である。しかし信仰の唯一のモデルではない。誰であれ群衆なしにイエスの教会にはならない。イエスによって呼び覚まされ承認された信仰の感動的な姿 — サマリア人、カナンの女、ザカリア、そして百人隊長 — が、神学および教会の実務において、万一にも不十分とは思われない。イエスにおける神の顕現の総合的な枠組みによって開始された啓示と福音の教えに適った関係の「民衆的な」次元が、それゆえ、共通である人間的な状態において、教会が生きた証拠であることを決定づける「原風景」として同化され、再確立される。ここで重要なのは、階級やデマゴグ〔民衆扇動〕の訴えのようなコンセプトではない。「神の民 (popolo di Dio)」は、人口統計学の数値や、信仰上の選択のようなものではない。「神の民」は、恩寵の普遍的な目的地の現実的な象徴である（現代世界憲章 9；フランチェスコ『すべての同胞たち』156-162 参照）。神の民は、至福の男女たち〔の出現〕以降、全員に開かれた救済を視野に入れて通路を開き、身を持ち崩した人や社会から排斥された人と交流する。恩寵の開放性のゆえである。それを正当化するのは、虚無との境界においてさえ、誕生させ生き返らせる神の愛である。これが、私たちの救いの原因である神 (Dio nostrae salutis causa) の恩寵の啓示が指し示している人間性に到達する仕方であり、その途上で

垣間見る仕方である。信仰の — および信仰について思考する — 場所は、この仕方でも明確にされる：すべての人間および全人類にとっての目的地が、まさにこのように、神の恩寵を理解可能な、説得力のある、救済をもたらすものにする仕方である。その余のすべて — 責務、超自然的な能力〔カリスマ〕、制度 — は、これに奉仕するものである：これに「奉仕する」か、それとも「空しく」奉仕しないのか（ペトロの手紙Ⅰ 5, 3；コリントの信徒への手紙Ⅱ 1, 24）。たとえ天使の舌で語り、あるいは山を動かすとしても、たとえイエスの名で奇跡をもたらすとしても、あるいは間断なく「主よ、主よ！」と懇願するとしても（コリントの信徒への手紙Ⅰ 13, 1-3；マタイによる福音書 7, 21-22 参照）。

今日のカイロス（危機）は、第一に、民の人間性が直接語られ、また聞かれる「言葉の賜物（*dono della parola*）」の復権を神学に義務づける。科学は、人間が自らに与える証言〔神秘性に近接する人間性〕の確固不動性を制圧する理由を何も持たない。私たちに共通である人間の直接性〔無媒介性〕（*immediatezza*） — まさしく民の日常生活 — に、言葉の尊厳と証言の權威を復権させることが、私たちが人間的な政策と信頼に値する批判的文化に期待する、最初の行動である。

この政策は、目下のところ存在しない。そのテーマは霧消し、その思考は虚弱である。しかし、精神の新たな政策の約束と動機を支えるために利用できる知的強靱さは不足していない。多くの — そしてますます多くの — 知識人がいる。彼らは古来からの人間主義的使命への自負の留め具によって、〔新政策への参加を〕妨げられている。〔新政策への〕同盟を促進するために重要なことは、論証され実証された確信によるよりも、所属組織の無気力〔惰性〕によって強いられてきた古来からの不信を、共通の原因〔共通因〕（*causa comune*）の名において克服することのみである。今日、共通の原因は、世界に存在することの人間的な意味の救済である：世界に来る意味、そこを去る意味、各々の人間が世界の歴史に永遠に刻むものの意味。「絶望の前で正当化しうる唯一の哲学は、贖罪の視点からすべての事物が眺められる仕方である、すべての事物を観察する哲学であろう。知識は他の光を持たない — もしそれが贖罪を起源として世界に来ないのであれば：残余はすべて、ただ継続的に事物を変化させ、技術の薄片にとどまるのみである」（テオドール W. アドルフ）。

したがって人間性の — およびそれとともに世界に来る男女の — 救済の原因〔救済因〕が、個人が抑圧されコミュニティが苦悩するこの時代において共有されるカイロスとして、ますます姿を現す。

つねに有効な、全員を義務づける創造主の普遍的な命令の前で、信仰は、信者の何ら

の特権も正当化しないし、他者の何らの疎外も義務づけない。つまり信仰は、男女に対して一今生きている者に対しても！一、世界に美を、歴史に希望を与える任務を委ねる：もっとも困難な移行〔推移、変化〕においても。しかしこの移行は、十字架に架けられ、死から復活した神の御子の人間性において、被造物たる人間と神が打ち立てる、破られることのない同盟という出来事を介しての、被造物の贖罪という前例のない啓示なしに、世界に、そして歴史に通路を開くことはない。福音の信仰が世界に伝える確信を支える他の証拠はない。私たちの〔救済の〕原因は、さもなければ失われる、神の優しさ (*tenerezza*) という原因である。それがなければ錯乱状態に陥る私たちを罪から贖う力は、神の愛の力である。共通の希望を照らすことのできる生の道も信仰の知性も、他には存在しない。

「一連の」証人たちの「一つの教会」の靈感へと再び開かれたアーチ — 「誰か」の近接によって生きること築かれる— は、『エクレジウム・スアム』^{*10}と『すべての同胞たち』を結合する。神学は、それを実践的なものにする橋を建造しなければならない。そして障害を取り除きつつ最初にそれを渡る。それなしにはいかなるカリスマも価値を持たない。愛に奉仕する教会の知性 — 現に存在する知性— は、信仰のある神学者にとって名誉の義務である。

「同胞愛」という教会の定式句 — 回勅『すべての同胞たち』の公表によって神の福音の「近接」へとラディカルに拡大された— は、〔人間の〕最終目的地の比較的未踏査の部分である。キリスト教の同胞愛は、あらゆる者に対する神の近接に光をもたらす思考と観想、言葉と行動の — つねに未完成の— 動態〔力動〕 (*dinamismo*) によって、罪を浄め完全なものになる。このスーパーインポーズ〔二重焼付け〕 (*sovrapposizione*) に達しない宗教的、行政的、秘跡的、典礼的同胞愛は、自らを喪失し内部で腐敗することになる。その「コミュニオン〔交わり〕」は、それを構築する基礎を置換し、それを正当化する名宛人を除外することになる。まさにこの瞬間に、より広いキリスト教化の外観にかかわらず、福音化はすでに失敗である。このバランスの喪失は、世界と歴史における神の働きに対する魅惑を開始すべき典礼の法悦の時に致命的にふりかかる。教会のコミュニオンの悲しくも自己準拠的な概念は、私たちの典礼の多くに見られる典型的に抑圧的な背景に燃料補給する。神の現世のカイロスと主の神秘の来臨という、秘められた〔二つの〕約束は、同時に満たされるか、あるいは空にされる。

弟子たちへの呼びかけ

パウロ 6 世の回勅『エクレジウム・スアム』の神学的大約び一新紀元を画する先見の

明のある〔千里眼的な〕パースペクティブによると、教会のきずなはこれまでも今後も、様々な世界を包含する一つの中心を共有する諸集団の律動に応じて、全体として理解されなければならない：神の王国にもっとも近い世界から、もっとも遠い世界まで。

この教会論の預言的ヴィジョン —それはまだ、それを系統立てて含意する神学上および司牧上の果敢な再開を経験していない— は、回勅『すべての同胞たち』が完全に表明する教会のミッションの適切な序文である。このヴィジョンにおいては、教会は、世界を贖う恩寵の統合力の生きた証拠である：世界を二つに分ける、信仰を切り離れた虚飾〔通俗趣味〕(mondanità)の道具ではない。ここで今、人間のコミュニティ全体のための仲介に基礎を置かない教会は、おそらく信仰のある弟子たちの真のコミュニオンではないだろう。神の御子は「世界を裁く〔有罪判決を下す〕ためではなく、それを救うために」来る(ヨハネによる福音書 12, 47)。そしてキリストは、私たちが回心するより前に、不信心な私たちのために死んだ：すなわち私たちを救った。「私たちがまだ罪人であったときに」(ローマの信徒への手紙 5, 6)。恩寵のキリスト論的普遍性に根差した教会の様相〔表現形式〕(forma ecclesiae)の、この証言に基づく証拠の首位性が、再び誰もが受容することで直接的なものになり、また信仰のある者の確信によって確固たるものにならない。

キリスト教社会の欧州の実験 —独自の方法で、人間の救済と最終目的地という視点から、対立的で分裂した二つの世界というラディカルな二元性を何とか回避しようとした— は、今や取り消し不可能なところまで没している。

教会はまさに今、労苦して勇敢に、イエスが拒絶した最後の誘惑 —数世紀にわたって人を魅惑し続けてきた— についての、幾度も繰り返されてきた誤解から脱しつつある。宗教のミッションは、世俗都市の政治的統治から分離されるべきである。市民社会の教会的管理 —世俗的な力でシステムをつくるよう不可避免的に誘惑される— は、あまりに多くの自由を福音から取り去り、あまりに多くの機会を悪魔に提供する。今や、教会が人智を管理運営する文化的プロジェクトからも辞去することによって、そのプロセスを完成する必要がある。この二重の制限は、完全に共有される人間的な状態に奉仕する義務から信者のコミュニティを隔て、また退去させるものとして構想されてはならない：その反対である。神の顕示は、それ自体、人間のコミュニティを富ませるために商うべき「共通善」として考えられるべきであって、地位によって得られる利益を教会が保障するような、教会のコミュニティの「私有財産」として考えられるべきではない。教会の目的は、強大な力の行使でもないし、信仰によっていくらか正当化される単一思考の覇権でもない。教会の目的は、共通の歴史において共有される世界を罪から買い戻す贖罪の希望である。今すで

に貧しい人、難民、排斥された人、身を持ち崩した人のための、まさに不可能な希望の可能性から着手すること。一見したところ彼らに対する呼びかけは見当たらない。教会は、まさにそしてまず何よりも、彼らに対する神の呼びかけを —その後、全員に対する神の呼びかけを— 証言する。〔全員が〕共有する人間の世界と二者択一的に並行するキリスト教世界の構築は、証人の過去の歴史を表現するが、それは、神によって今開かれる未来を照らすことをしない。欧州のキリスト教国出身のカトリック信者は、彼らのキリスト教思想が、地球上の全カトリック思想がそれとシンクロナイズし、合致しなければならないモデルであるかのように自らを提示し続けている：本物の伝統の回復の継続を望むのであれ（反・改良主義者のイメージを復権するような）、あるいは誕生しなければならない改良された新しいキリスト教を視野に入れることを願うのであれ（原初の純粋さを回復するような）。いずれの場合においても、根底にあるイメージは、過去への回帰の復権に固執している。この考古学的帰還は、その論拠のあらゆる評価を度外視すれば、神の新しいカイロス —それは過去においては単に存在しなかつただけである— に居住する任務から、知性と心を抜き取る。制度的には、非宗教的な人間の世界は、歴史上、未開の対話者である。神が私たちに福音的および創造的に居住するよう求めるカイロスの美と挑戦は、ここにある。

最後に、私たちの呼びかけは、専門職神学への —そして一般にあらゆる信者への— 情熱的な要請である —実際に私たちを人質にする二重の二元論 —教会コミュニティと世俗的コミュニティの；創造された世界と救済された世界の— を解体する任務のための。

解体される必要がある二元論の最初の側面は、教会と世界の間にもっともらしさを与える側面である。あたかも本当に二つの世界があるかのように。その二つの世界は、関係と協調を成功裡に取り決めて、二者択一的に居住することができ、また居住しなければならないような世界である。私たち信者は、全員の世界に居住する様態〔モード〕にあるが、完全に別の世界にいるわけではない。信者と、神から到来するに違いない新たな生への入口としてそこに居住するよう招かれた全員との骨の折れる同盟によって形成される運命に対して、完全な情熱を注いでいる。現実には、私たちはこの仕方でも教会にも居住している：選ばれた者〔選民〕の精神的〔靈的〕貴族社会（*aristocrazia spirituale*）—精神的〔靈的〕通俗趣味（*mondanità spirituale*）の暮らしとも両立する— としてではなく、神とその被造物である人間 —生命の傷つきやすさにもっともさらされている人を初めとする— との間の同盟の虹（*arcobaleno dell' alleanza*）を護る歓迎の幕屋として。世界には劇的な悪の力が存在する：しかし世界に対する神の呪いは存在しない。このとき、教会の生息地は恩寵の事象が神秘的に発生する、罪から浄められた避難所であるという観念は大いに均衡を欠くように思われる。現実には、恩寵という事象は、神の慈悲によって、毎日、

そして世界中で発生する。これは神の王国の予測できない到来と、普遍的な近接を信じていることの表現である。

この事象の深奥にあるのは、神の被造物の戒律である。神は世界と歴史を男女と世代に、思考と労働に、芸術と技術に、人を歓待する都市の経済に、そして共有される正義への情熱に委ねる。教会の同胞愛という第一の証拠（*evidenza*）が、神の言葉〔理性〕にこの生命力（*vitalità*）〔実践〕を、そしてこの生命力に神の言葉を取り戻さなければならない。

神の賜物を日々期待して世界を統治するよう要求された男女の協調 —この言葉の信憑性は、今日、傲慢な科学と特殊用語による神学によって、過度に貶められている。信仰のある、および信仰のない知識人の第一の任務は、人々の共同生活に人間性を証明する権威を取り戻させることである。信仰それ自体が人間から人間性を学ぶ。神の御子が信じられないほど長い間、人間の胎内にとどまり、生涯の一時期そこで知恵と慈悲を増したのは偶然ではない：私たちがいかに心を用いるか〔大切にするか〕、いかに深い悲しみを覚えるか、生活の事象を私たちから学ぶことによって。そして彼が「御父のこと」を話し、また実行し始めたとき、「人々」は間違いなく確実に、この親密性の深さを知覚した。また、感受性 —それによって神の新たな福音そのものが前進した— に感銘を受けた。人の心を打つこの交流において、信仰の思考と人間的な思考はともに成長する。現代教会の私たちの伝統において、聖職者の排他的統治、修道者の単一モデル、および教義のカトリック要理百科全書主義は、共同生活のこの直接性〔無媒介性〕から人を遠ざけるような信仰形式の飽和状態の効果を現実のものにした：それは今、それ自体の重みでたわまざるをえない。

教会システムの孤立は、大抵の場合、宗教儀式の伝統の弱体化と、世俗的な進歩に包囲される事態へと交互に引き戻される。現実には、それはますます自己集中している教会がもたらした帰結である：誰でも自分で自分の生命を得ようとすれば、福音書の記述どおり、それを失うことになる〔マタイによる福音書 16, 25〕。

この〔自己〕集中は、福音の熱情 —それは、理性と宗教の何世紀にもわたるルーティーン〔決まりきった単調な日常〕を快活に覆し、私たちの惑星を植民地化している自我の情緒的自閉性の悲しい激情を揺り動かす— の創造的な喜びと、一瞬の閃光がもたらす即興から酸素を奪い取る結果になる。あらゆる証人の近接のための確かな基礎として、洗礼による同胞愛の網を拡張することが決定的な手段である。キリスト教的な様相〔表現形式〕の模範という視点からは、信者による一般司祭職との比較において、叙階された特別聖職〔司教、枢機卿〕（等級の区別だけでなく、実質的な様相も異なる）を規定する公式

規格〔フォーミュラ〕を十分明確にする必要があるだろう。一般司祭職は、実際、叙階された聖職者の下位の等級や付帯的補完にすぎないのではない。それは、洗礼の秘跡によって封印された、〔教会を〕実質的に補完する一部である。それは、聖省〔官庁〕の叙階式によって制定された聖職者を仲介する、弱い二次的なバージョンではない。キリスト教的形態の聖職権モデル ―叙階された聖職者に特別の権威と限定的な配置を再確立する― からの退出は、神学的にはここから始まることになる。次のことを忘れてはならない：聖省とカリスマが提示〔描写〕しなければならないものに奉仕する、同胞と受洗した証人の教会のための新しいパラダイムは、単に奨励され勧告されるだけではなく、コミュニティ全体のシノドス（公会議）の脈絡において綿密に決定され、認可されなければならないことを。

他方、家族と同胞愛の網としてのコミュニティの実践への愛に立ち返ること― すなわち、命令の鎖の軍隊モデルから手際よく辞去して、喜びをもって被造物たる男女の同盟に賭けること― は、司牧的にもただちに開始できる。神学、教会法、教育の〔教会〕諸機関の現状の不備において、寛大にも聖省の命令と、それぞれのカリスマ的召命に敬意を払おうとしている多数の司祭、修道士、修道女を考慮に入れるなら、ますますそうである。これらの諸機関は、〔本来であれば〕福音のエネルギーを開放し、歓喜に満ちた透明性を支えなければならないはずである。

生命と教会のミッションの新しいパラダイムのために、きっぱりと解体されなければならない二元論の第二の側面は、創造の世界（自然において決着する世界）と救済の世界（超自然的な世界）を分離する ―そしてただちにそれに抵抗する― 側面である。この並行論（*parallelismo*）は、存在論的および政治的機能のために構築されたが、もはやその機能を果たしていない。キリストにおける万物の救済の予定と、被造物を悪から完全に解放する神の御子の情熱に照らして、生命を与え、それを救い、彼のうちにそれを抱擁する、神の至上の自由は、完全に確実なものである。そして被造物の自由は、神の贖罪を待つ間、生命の世界を居住可能なものにする名誉と重荷を与えられ、全力でそれを望むように私たちを鼓舞する恩寵によって支えられる。記録簿の交換（*cambio di registro*）が、現在のカイロスにとって決定的であると思われる。そしてカトリックの全教義は、その一文も失うことなく、この結集〔された記録〕の内部にある。もし私たちがキリスト教の全言語を、立証された啓示を記す、壮大で具体的な創造の神学の財産（創世記〔創造の世界を記録した旧約聖書の最初〕から黙示録〔救済の世界を記録した新約聖書の最後〕まで）に転換し、十字架に付けられて死から復活したイエスによって封印された神の王国の福音の核心部分を形成することに成功するなら、キリスト教の言語は自動的に、地上の住民が生命と神について考え、語るための言語 ―諸々の言語― に近接する対話者になるだろう。

信仰は、神の近接の告知についての先入観なしに、世俗世界の諸言語のうちに居住することを学習するだろう。そして、信仰に近接する教会は、カナンの女、サマリアの女、ザカリア、百人隊長にとっても居住可能なものになるだろう。地政学的距離についての先入観なしに。

賢者に開かれた手紙

「そのときから私たちはキリストの代わりを務めています —あたかも神が私たちを介して勧告するかのよう。キリストの名においてあなたたちに懇願します。神と和解させられる状態に自らを置いて下さい〔神の恩寵を再び得るために、他人の罪を赦して下さい〕」（コリントの信徒への手紙Ⅱ 5, 20）。

私たちは謙遜に、そして決然と、私たちの時代の知識人に依頼する。相対主義と脱道徳化に順応する精神に対する自己満足的などの譲歩からも、支配的な文化を浄化し純化することを。人々は技術主義〔テクノクラティック〕経済の横暴と、共有される人間性への無関心によって、すでに十分に疲弊しきっている：金銭の偶像崇拜は、洗練された、とらえどころのない、無数の合理的正当化が可能であり、それを認めさせるための並外れた手段を備えたイデオロギーになった。私たちはあなたたちに、まず最初に嘆願する。金銭の不正に対して、理性と思考、科学と法の幫助犯（*complicità*）を提供しないことを。私たちは、神が結び付けるもの —まず第一に、そして他の一切のものの中に人間— を金銭が分断することを妨げなければならない。私たちはあなたたちに懇願する。私たちが共有する起源と私たちが共有する目的地という友好的な考えを人々に回復させることを。人間知〔人智〕にその公正性〔清廉〕の名誉と、その責任の重荷を回復させる 때가来た。真理の認識は正義への情熱を決して免れない。私たちは、共有する人間性に対する責任感を科学に免れさせる認識の実践を、これ以上長く支持することはできない。

現代的個人、すなわち他者から孤立して自己実現を図る欲求の主体のさらに悪化した自己準拠は、コミュニティの諸々の形態〔教育、医療、福祉、経済制度 etc.〕を汚染した。汚染された諸々の形態それ自体が、自然と文化によって利用可能になった財〔ex. 社会的共通資本、コモンズ etc.〕を享受するための、敵対的な競争の精神にまで浸透可能なものになりつつある。

古い亡霊が帰還する。あるいは少なくとも予想外の勢力を再び取り戻す：民族主義、

外国人嫌い、節操のない家族主義、エリートを選別、デマゴグ〔民衆煽動〕の操作。コミュニティへの不信と、個人の道徳的腐敗は、相互に支え合う。一協力する理由を失い、疑惑への動機を蓄積する人間のヴィジョンによって誘導された、悪習に満ちた〔欠陥のある〕循環〔円環運動〕のうちに。しかしながらコミュニティの外部で、また既製の回答の外部で質問されるや否や、無数の個人は彼らの自発的な熱望 ― 宗教と文化を持つすべての人間存在、自由で幸せな相互関係〔互惠性〕を保護する政治と法制度への熱望 ― を証言する。ちょうど経済と技術 ― 私たちの傷つきやすさのケアに利用でき、私たちの生きる労苦を大いに支えることのできる ― への彼らの希望を証言するのと同様に。これらの無数の人々は、一地球のどの片隅においても、どの空の下においても一、自分たちの義務を果たすこと、自分の発言に責任を負うこと、自分たちの子どもを育てること、所属するコミュニティを助け外国人をもてなすこと、に毎日を費やしている男女である。その名にふさわしい人間的な生は、彼らの忍耐のお蔭で存在し続けている。

文化は、これら無数の人々に対して寛大ではない：しばしば彼らの純真さ、多産、他者の求めに応じる準備があること（*disponibilità*）を皮肉りさえする。彼らに時代遅れだと感じさせる。彼らの献身の美しさへの賞讃を奨励しない。彼らの節度を異常とみなし、彼らの寛大さに驚く。全員が参与者として認識することを誇りうる人間性のヴィジョン ― なぜならそれは端的に、彼らの墮落に対する闘争を全員で支え、それに勝利するために全員で熱中する喜びを再発見するから ― の情熱を支えない。私たちが私たちの隣人に、力と富と引き換えに幸福と正義を約束するとき、私たちの唇は、慢心をもって宣言され軽率をもって名誉を傷つけられた誓いに思いを致して、震えるべきである。自由と平等の力は、貧しい人々の権利や人々の同胞愛のために用意された要塞ではない。

この点に関して、私たちは、この時代の思考に見られる傾向を転換することをあなたたちに提案する。神の名を無視しないで下さい。真摯な信者たちの祈りは、地球のすべての男女のために神の名に向けられている。そして、その信者たちは、すべての貧しい人と見捨てられた人のための仲介者として自分が使われるよう、神に自らを委ねている。私たちが批判して下さい。批判すべきときには ― たとえ批判すべきでないときにも。しかし尊敬をもって神の名の神秘を護って下さい ― たとえあなたたちにとって不可解でも。

この名が全員のために護られる限り、逃げ道のない者、希望のない者はいない。十字架に付けられることが残酷にあざけられ、死から復活することが嘲笑されるとき、すべてがより剥き出しでより邪悪である。キリスト教の信仰は、取り消しえない、永遠の、心変わりすることなく人間に差し向けられる神を、敢えて告知し証言する：どのような破滅からも人間を神の家に連れ戻る、そのきずなに喜んで名誉を与える心づもりで。神の名誉

—生命と生命の約束を生じる愛の正義〔善を欲する正義〕(giustizia del voler bene) — は、このきずなによって、かつて一度限り完全かつ決定的に磔にされた〔十字架に付けられた〕：その栄光は、自由で至上の憐憫の情ゆえの、私たちの贖罪である。私たちは懇願する。神の聖なる名をあざけないで下さい：それと和解させられる状態に自らを置いて下さい。私たちとともに —私たち自身を急き立てつつ— 他の誰も創造することのできない、この善を欲する神秘〔愛の神秘〕と、その正義への信仰の要塞に守備隊を駐留させて下さい。この啓示の驚くべき並外れた衝撃にさらされる宗教心自体が、そのたびごとに優しさ(tenerezza)と強さ(forza)の視覚を失う可能性がある。神の名が居住する愛と正義のパラドックス〔逆説〕の眩惑〔めまい〕によって、宗教それ自体が、その分裂の犠牲者になりうる。正義への愛なく、また悲しみの認識なく、感受性豊かな靈魂の神秘主義の感覚麻痺に自ら陥りつつ。〔宗教は〕強さの優しさを空にしうる。神の名において壁を建設し闘争に点火しながら、強さもまた優しさを攻撃しうるように。私たちは、人間の精神に与える神聖性のインパクトについても、同時に、油断なく警戒しなければならない。福音書は、この要塞に金の封印を施す：宗教心それ自体が試練に遭うことを受け入れなければならない。その封印は隣人愛である。福音書はこれを、神の愛の戒律と同じ高さに上げる。「全心をもって、全靈魂をもって、全精神をもって」愛されることができ、愛されなければならない唯一のもの。なぜならそれだけが、あらゆるものに居住しなければ〔宿らなければ〕ならない、善を欲する〔愛の〕、祝福された、救済をもたらす神秘だからである：それは、私たちの生命の起源であり、私たちをその目的地の約束において一つに結びつける、すべての優しさとすべての力の神秘である。

福音書の「隣人」は、近くの人でも遠くの人でもない。福音書の隣人は、「誰でも」窮地にある人間である。福音書の近さは、—それを明確に規定することなく—、善意と好意の真摯さを測る。そして、コミュニティー —とその各構成員— が、人間のどのコミュニティからも実質的に「外部」と感じられるほど、その人の善を欲する〔その人を愛する〕「限界」にある誰かのために、正義への真の愛を試される態勢〔姿勢〕の真摯さを規定する。というのも、〔誰かが外部にいるのは〕彼がそこから出ることを欲したからではなく、コミュニティが大きくなる代わりに引きこもったからである。

〔仮想の敵と戦った〕ドン・キホーテのごとく、妄想に取り憑かれたかのような信仰対理性の馬上試合に巻き込まれ、交互に風車の役を割り当てられなければならない私たち自身、すなわち信仰の内部と外部の思想家は、おそらく罪深く無頓着に、無益に論争好きな私たちの官学風アカデミズムの真の犠牲者を顧みてこなかったのではないか？ 個人とコミュニティとの最上のきずなである、私欲のない無私の知的仲介への信頼を失った同時代の人々は、しかし、そこから、全員が関係を持つ知恵の探究への、何か喜ばしい情熱を引

き出してきたのではないだろうか？ 人間の歴史は、政治と行政、帝国と戦争、技術と征服の歴史である前に、生命の同盟と道〔旅路〕の同胞愛の歴史である。もしキリスト教コミュニティが、神が人間に対して示す祝福という視点から人間の歴史を眺めることを再開するなら、まさにこのことを私たちは祝わなければならないのではないだろうか？ 一神の祝福は私たちに共通である。誰も排除することなく、特権を与えることもなく。生命の祝福を共有し最終目的地とすることへの福音の開放の優しさと強さ ―復活した神の御子と創造主の霊において示された優しさと強さ― が、信仰の証明の基礎と論拠である。深淵の前と後に誰かが私たちを愛するのか、あるいは虚無か。誰にとっても〔そのいずれかである〕。

教会は、今日、その最高の教権によって、より謙遜かつより私欲のない視線で、同時に以下を再考するよう迫られている。どの夢とヴィジョンが現実にも育まれたのか。どの願いと仲介が現実にも伝播したのか。どの名誉と尊厳が、個人と市民の人間性の状態のドラマに具体的に導入されることができたのか？

最後に、人間のコミュニティは、それにふさわしく地上に居住しなければならず、無益に ―すなわち何とはなしに、あるいはあたかも取るに足りないもののように― 居住することのないよう、すべてをしなければならぬ。人間らしくあり続けるために、同胞愛を救うこと。試行錯誤によってつねに新たに探求される、意味づける人間の理性の貢献なしに、信仰のキリスト教思想は、知的誠実をもって現実にも地上に居住することはできない。それは、神の受肉の証明を要求するからである。神学の側では、試行錯誤しながら、信仰の幫助犯となることを享受しないやり方で、神聖なものの曲解に批判的に立ち向かうことを受け入れなければならぬ。私たちは、人間性に鋭敏な思考と、神聖性を救済する解読〔通訳〕との同盟を、未来世代に送り返さなければならぬ。単に党派の規律に服従するための、相互疎外の必要性を良心に強いる数世紀が経過した後、私たちは精神〔霊〕(spirito)の新たな政策を視野に入れて、感情移入〔共感〕に基づく交流の自由を経験する瞬間が到来したことを確信した。宗教的および世俗的なあらゆる機関の崇高なる無視の配備〔同胞愛とは逆方向の〕は、兄弟殺し〔仲間の殺し合い〕 ―宗教的および反宗教的な― において、私たちと私たちの子どもたちを犠牲にしてあまりに長く生き延びてきた。全員が兄弟姉妹である ―だれ一人欠けることなく〕。

真摯な友情の精神をもって、ご注目ありがとうございます。

あとがき

回勅『すべての同胞たち』で、教皇フランチェスコは、教会にも世界にも、パンデミックによっていっそうドラマティックなものにされた私たちの時代の近未来が参入する地平線を提示した。過激な個人主義の猛烈な進撃は、私たちが共有する人間性〔ex. 慈悲、寛容 etc.〕に対する愛着の喪失とともに、倫理と愛情の、共同体と人間主義の精神の質を細らせる危険な通路を開いた。この質の劣化は、超越という宗教的証拠からの世俗文明の撤退が市民的人間主義を促進する決定的要素であると想像した、まさに現代性〔当世風〕の相続人たちの不意を突いた。

教皇フランチェスコが生命アカデミーに宛てた手紙『人間のコミュニティ』の中で、実現しなかった現代性の約束として提示した「同胞愛」が、再び繰り返し提案される—私たち全員が「軸方向の (assiale)」瞬間、すなわち現在と未来にとって決定的な瞬間に参入させられていると感じる、歴史のこの瞬間の効力によって。世界—世俗都市—は長いこと、人格とコミュニティの人間性について、神に教えられることを止めている。パンデミックが深めたように見える同胞愛の空洞は、逆方向の幫助犯 (complicità) によって埋められる運命にある。共通の愛情に対する個人の無関心 (単に共通善や共通の利益に対してだけでなく!) は、自由や平等のよい部分をも脅かすモンスター—政治的、経済的、法的—を生み出す (そして、諸規則に匿名の威嚇を混淆した混ぜ物は、それを悪用する狡猾な者に報いる結果に終わる!)。

私たちが公表する文書—生命アカデミーと関係する神学者と哲学者のグループの共同執筆作業の成果—は、この変化の時代への参入を意図する。信仰のイニシアティブを再生するための好機とも感じつつ: それは、よりよい時代を待つ消極的にそれを耐えること、あるいは単なる怒りの対象にとどめることはできない。消極性と怒りは信仰の目を曇らせ、私たちがこの時代の男女と共有する歴史の時間の中で、神の時間を識別することを妨げる。

私たちは、教皇フランチェスコがしばしば繰り返す、時代の変化の中にいる。もはや単なる移行の時ではない。欧州のキリスト教は、この大陸における推進力を失ったように見える。私たちは、聖書の証言と使徒の伝統のお蔭で、キリスト教の真理を構成する諸要素が私たちに到達したことを知っている。それは、私たちが歴史の時間の間、無傷のまま護らなければならない神の言葉への忠誠の、つねに生きているパン種と酵素として、私たちに到達した。しかしこの信仰の遺産は、神の王国が人間の歴史全体を巻き込む仕方で、つねに新たに世界という畑に撒かれる種である。私たちはそれゆえ、喜んで、主の来訪が

私たちに定めるカイロスを見極める準備をしなければならない — 熱心に、種を撒く畝を作る鋤を手にしながらか。後ろを振り返ることなく。教皇フランチェスコは、これにおいて私たちの前にいる、と私は言いたい。そして、私たちが私たちの仕事を — 彼の仕事ではなく — 喜んで果たすことを求めている。主は私たちに必ず聖霊を与える — 思考と、それに対応する行動に必要な聖霊を。

個人と人民の歴史は、その希望と困難のすべてにおいて、キリスト教コミュニティに委ねられた福音を証明する言葉と実践を、教会の様々な組織のすべてにおいて実行する場所である — それ以外の場所はない。今の時代の困難は、もちろん過小評価されてはならない。反対に、それらは細心の責任ある配慮をもって分析されなければならない。しかしこの時代が要求する創造的な責任は、信仰の視点から、留保なしに引き受けられなければならない — 信仰が私たちに吹き込む全知性と全情熱をもって。

信仰はつねに世界のうちに生きるが、それは決してこの世界ではない。イエスの言葉は、次のことを明白に理解させる。神の王国の歴史的定着に生来的にふさわしい世界は存在しないこと、また、王国の仕事が全く浸透しない世界も存在しないこと。生命アカデミーは、人間の生命のケアの倫理 — 生命の傷つきやすさ、脆さ、生命を弱らせ希望を脅かす諸々の傷を自覚しつつ、あらゆる年齢と状態における生命のケアの倫理 — に直接巻き込まれる専門職精神 (professionalità) の知的奉仕に捧げられた、— またそれゆえ証人としての、また司牧者としての奉仕にも捧げられた —、教皇庁の機関である。この試練の厳しさは、死すべき運命にある人間の境遇の弱さに関係するだけでなく、私たちの故意の無関心と力の濫用という尊大にも関係する。このパースペクティブにおいて、生命アカデミーは、人間の生命のケアに巻き込まれる知識と実践の生命倫理的な識別を方向づけ支援するのに適した職業的卓越のネットワークを、科学技術領域においても哲学神学領域においても構築する命令を受けて、誕生した。この識別は、[アーチ型を描く] 人間の実存の稜線の極限 [限界域] — そこでは傷つきやすさが最大であり、他者 (個人およびコミュニティ) のアクションに事実上すべて依存する — に、特有的な注意を向けた。以後、その自然的な発展として、アカデミーに関与した科学者たちの科学的で思慮深い仕事は、人間の傷つきやすさが出現する全経路への個別特種的な注意を生じさせてきた。

現状において、アカデミーは、固有の注意の範囲をさらに拡大する必要性を通告した。なぜなら、一方では、科学技術の尋常ならざる資源が、生きている有機的組織体 [生物体] — 人間を含む — を、私たちがこれまでに認識した人間主体のそれとは比較できないような仕方で、遺伝的に選別され技術的に装備された生命形態を野心的に製作するために利用しうる素材として個体化するための道を開いているからである。また他方では、伝統的に

人間存在の自然本性的な限界の尊重に関係する生命のケアに対する倫理的感受性が、今や、まさにこれらの限界を議論に付す前例のない類の挑戦によって拘束された〔機能不全の〕状態にあるからである。そしてそれは、誕生と死に関してだけではない。かかるものとしての生命に関わる善と悪、正義と不正義、命令と自由に関しても〔倫理的感受性は機能不全の状態にある〕。

アカデミーは近年、まさにこの進化によって据えられた「グローバル・バイオエシックス」の問題の地平に関して機敏に活動を開始した。固有の伝統の継承との調和において、しかしまた慎重に責任をもって、進行中の進化の終わりを予知する義務をもって。「バイオエシックス〔生命倫理学〕の」問題は、今や直接的にそして完全に「人間学〔人類学〕の (antropologica)」問題と重なり合う。一新時代において問題となる、まさに進化の終わりの原因 (ragione) において。

かかるパースペクティブにおいて、生命アカデミーは教会と人間のコミュニティに奉仕するために、これに関わる専門的助言 (consulenza) の側面 ― 顕著に哲学および神学の ― を強化することを望んでいる。生命倫理学と人間学のつながりの広さによって触発された特別文書が、哲学と道徳神学の領域における専門家チームによって現在起草段階にある。アカデミー首脳部によって招集された、基礎神学と神学人間学の専門家の間での共同作業として作成された、私がおここに提示する文書は、この拡大と深化の軌跡の一部である。私たちが直面している新たな挑戦の緊急性を前に、もはやじっとしていること、またいつもの考えをうんざりしながら繰り返し続けることはできない。反対に、神学と科学は、技術的發展と人間学的変化が私たちの目の前に置く新しいシナリオと対峙することに創造性をもって着手する緊急の必要がある。

権威ある教権は、主に教皇フランチェスコの教えにおいて継続的かつ明瞭に、この掛かり合いの必要性を喚起する。教会諸機関は、信仰の知性と人間の思考とのより深いたゆみない対話を促進する役割を果たすことを要求されている。この刷新によって、神学と司牧は、同一の活動の二つの側面として収斂する。最近の回勅『すべての同胞たち』は、人間のコミュニティ全体に奉仕する知的同胞愛の有効かつ不可欠な変化形〔バリエーション〕 (declinazione) として、この対話〔信仰の知性と人間の思考との対話〕の新たなパースペクティブをイメージするよう私たちを鼓舞する。学際的および各学問分野を超えるパースペクティブを再発見する推進力が、まさに神学の側でこの方向に進んでいる (使徒憲章『真理の喜び (Veritatis gaudium)』)。教皇庁生命アカデミーは謙遜に、しかし目下の緊急性を自覚して、この文書をより広い熟考を呼び覚ますために提供する。重要なのは、この文書が、回勅『すべての同胞たち』の深遠なメッセージとこの回勅の公表それ自体が持つ預言

的ヴィジョンを起点とする熟考を始めようとする簡単なテキストであることである。短時日のうちに、回勅によって開かれたパースペクティブの個々の核心的なポイントを掘り下げた論文の公刊が続くことになる。

期待される良い徴候は、この提言が、熱意と透明性の新たな精神を鼓舞することである。その新たな精神は、広範囲にわたって、人間主義の現在のテーマと宗教的経験の純粹性の識別に敏感な神学のコミュニティを、また知的および科学的コミュニティをも巻き込むことができる。知的作業の断片は、神学の領域内においても、特にもしそれが低調な議論の停滞〔膠着状態〕を助長するときは、決断をもって、処理済みの文書として保管庫に収納されなければならない。共有される生の共通善を視野に入れて、同胞愛のコミュニティの精神によって喜びが居住する〔宿る〕科学コミュニティこそが、共通である人間の思考を方向付ける任務に名誉を与える最善の方法を熱心に議論するのにふさわしい場所である。惑星規模の個人主義の悲しい精神と、道徳的腐敗の甘受によって過度に磨り減らされた思考を、再び生きようとする人間のコミュニティが経験している。愛を証言する重荷と名誉を委ねられた者から開始すること。それが私たちを希望と信仰に帰還させる。

+ ヴィンチェンツォ・パリア（教皇庁生命アカデミー会長）

* 本稿は、*Salvare la Fraternità - Insieme : Un appello per la fede e il pensiero* の全訳である。

訳出はイタリア語版（原文）から行った。

注および〔 〕内は訳者による。

(traduzione giapponese : Etsuko Akiba)

訳：秋葉 悦子

^{*1} FRANCESCO, Lettera enciclica *Fratelli tutti. Sulla fraternità e l'amicizia sociale*, 2020. 邦訳として、『回勅・兄弟の皆さん』教皇フランシスコ（西村桃子訳）（カトリック中央協議会、2021年）。

^{*2} ギリシア語新約聖書における重要な言葉で、「神の目的のうちに定められた時」を意味する。

ティリッヒの解釈では「歴史の危機ないし転機で、好機が続いているうちに人にその人独特の実存的決断を要求するような時」。新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典・第1巻』（研究社、1996年）88頁〔Alan Richardson 執筆部分〕参照。

*3 メタノイア。神に心に向け直すこと。

*4 Francesco, *Veritatis Gaudium, Costituzione Apostolica, Circa le università e le facoltà ecclesiastiche*, 2017. 12. 8.

*5 Lettera del Santo Padre Francesco al Popolo di Dio, 20 agosto 2018.

*6 キリストの犠牲による罪の贖い。贖罪。

*7 FRANCESCO, Lettera enciclica *Laudato Si'. Sulla cura della casa comune*, 2015. 邦訳として、『回勅・ラウダート・シ』教皇フランシスコ（瀬本正之＝吉川まみ訳）（カトリック中央協議会、2016年）。

*8 「人間のコミュニティ (*Humana Communitas*)」は、教皇フランチェスコが生命アカデミー設立 25 周年に際してアカデミー会長に送付した手紙のタイトルである。Lettera del Santo Padre Francesco al Presidente della Pontificia Accademia per la Vita in occasione del XXV Anniversario della sua istituzione (11 febbraio 1994 - 11 febbraio 2019), *Humana communitas [La comunità umana]*.

*9 Theodor Ludwig Adorno-Wiesengrund (1903-1969)。ユダヤ系ドイツ人。フランクフルト学派の哲学者、美学者、社会学者。

*10 Paolo VI, Lettera Enciclica *Ecclesiam Suam. Per quali vie la chiesa cattolica debba oggi adempire il suo mandato*, 1964. 邦訳として、『回勅・エクレジウム・スアム』教皇パウロ 6 世（東門陽二郎訳）（中央出版社、1970年）。